

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 11 集

あ み だ じ
阿 弥 陀 寺 遺 跡

1990

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県海部郡甚目寺町は、甚目寺観音や法性寺などの古刹が語る
ように歴史の息づいている町であります。しかし、現在そのような
古い町にも次々と都市化の波が押し寄せており、町の姿も刻々と変
わりつつあるのです。そうした現代の動きの中で、阿弥陀寺遺跡は
弥生時代と鎌倉・室町時代に生きた祖先の姿を今に伝えてくれたの
であります。

阿弥陀寺遺跡の発掘調査は、甚目寺町北西部の田園地帯を北東か
ら南西に走る名古屋環状2号線（一般国道302号）建設に伴う事前調
査として、愛知県の委託事業（教育委員会を通じて）として財団法
人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財発掘調査部が昭和56年に
開始しました。その後昭和60年には調査主体が財団法人愛知県埋蔵
文化財センターに移行し、昭和61年に発掘調査は完了しました。そ
れ以後は、調査成果の公表に向けて整理・研究を進めてまいりました
が、ようやくここに本書をもって阿弥陀寺遺跡の全容を示すに至
りました。本書が甚目寺町の歴史の一端を記録にとどめるとともに、
祖先への顕彰になればと存じます。

最後に、この調査を遂行するにあたり、地元住民の方々を始め、
関係者および関係機関の御理解と御協力をいただきましたことに対
し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
理事長 松川誠次

例　　言

1. 本書は愛知県海部郡甚目寺町に所在する阿弥陀寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は名古屋環状2号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査であり、愛知県の委託事業（教育委員会を通じて）として愛知県教育サービスセンターおよび事業を引き継いだ財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、昭和56年10月から昭和61年6月まで実施した。
3. 調査体制は別に記載したとおりである。
4. 調査にあたっては、次の関係各機関の御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、建設省英知国道工事事務所、日本道路公团名古屋建設局、甚目寺町教育委員会。
5. 調査・報告書作成にあたっては次の方々の御協力があった。（順不同・敬称略）

加藤安信、遠藤才文、紅村弘、高橋信明、立松彰、贊元洋、岡本茂史、加納俊介、杉崎章、中野晴久、伊藤久嗣、新田洋、鈴木克彦、増田安生、寺沢薰、藤田三郎、松本洋明、兼康保明、岩崎直也、小竹森直子、山崎秀二、正岡謙夫、平井典子、島崎東、福島正美、湯尻修平、板木英道、増山仁、笠沢浩、神村透、小林正春、市沢英利、中司照世、赤沢徳明、平野吾郎、鈴木敏則、佐藤由紀男、鈴木正博、鈴木加津子、小宮恒雄、松本完、安藤広道、石川日出志、黒沢浩、原口正三、深沢芳樹。
6. 報告書作成に関わる整理作業はもっぱら石黒立人があたり、次の方々の協力を得た。

赤塚美智代、龜井けい子、鈴木規子、永金千佳、河合明美、古橋佳子（以上調査補助員）
7. 本書の様式
 - 過去に刊行した「財団法人愛知県教育サービスセンター年報Ⅰ～Ⅲ」による概要報告の記載事項はすべて本書で改めるとともに、かつて報告した内容も今回取扱選択を行っている。対応関係は本書で示しているが、未掲載部分は該年報を参照していただきたい。
 - 平面図基準座標・遺構記号：本センターの慣用法（昭和59年度以降）によった。ただし、調査時においては昭和58年まで任意の座標系を使用していた。
 - 遺構番号は弥生時代：0～999、鎌倉・室町時代：1000～とし、遺物番号は弥生時代：0～1999、鎌倉・室町時代：2000～とした。
 - 実測図の縮尺値：遺構図の図版は、弥生時代関係がプラン 1/1000、1/500、1/200、土層セクション 1/100、鎌倉・室町時代関係が 1/2000、1/400、1/200。挿図は図中に示したが、原則はプラン・セクションが 1/80、土層セクションが 1/40、出土状態が 1/40。
 - 遺物は原則として土器が 1/4(拓図 1/3)、石器が石錐・石錐 2/3、それ以外 1/2、木器は 1/3 として、まぎらわしい場合と例外については図中に縮尺値を表示した。したがって、スケール目盛り表示の場合には注意が必要である。
 - 遺物写真は縮尺値を原則 1/3 とし、それ以外は縮尺値を表示したが、あくまで目安にすぎない。
 - 註・参考文献は巻末に一括して記載した。
8. 本書の執筆は石黒立人、北村和宏、森勇一、伊藤隆彦、永草康次、緒真美子が分担し、石黒が編集した。分担箇所は各章扉の目次に記載した。
9. 本調査に関する資料はすべて財団法人愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

調査主体 昭和56年～昭和59年 財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査期間	調査指導	組織	事務局	調査担当
昭和56年10月～3月				
愛知学院大学教授	瀧田 正一(考古学)	調査部長	丹羽 功	発掘調査所長 高沢 茂樹
名古屋大学教授	井関弘太郎(地理学)	庶務補佐	水谷 良夫	主事 中村 美規
信州大学教授	大參 義一(考古学)	主査	松原 広治	〃 竹島 真造
南山大学教授	伊藤 秋男(考古学)	主事	松田 定次	〃 石黒 立人
東海市平州記念館	立松 彰(考古学)	〃	菅沼真四郎	

兩宋詞

昭和57年4月～6月 同9月～昭和58年2月							
愛知学院大学教授 渡田 正一(考古学)	調査部長	丹羽 功	発掘調査所長	高沢 茂樹			
名古屋大学教授 井関弘太郎(地理学)	庶務補佐	水谷 良夫	主事	中村 美規			
信州大学教授 大參 義一(考古学)	主査	松原 広治	〃	竹島 真理			
南山大学教授 伊藤 秋男(考古学)	主事	松田 定次	〃	石黒 坦立			
京都大学監修類	〃	曾沼真四郎	達雄	才文			
研究所教授 江原 昭祐(人類学)	〃	〃	服部 長正	良夫			
東海市平州記念館 立松 彰(考古学)	〃	〃	片山 善一	〃			

第六期

昭和58年10月～昭和59年1月 同3月	愛知県立大学教授 澄田 正一(考古学)	名古屋大学教授 井関弘太郎(地理学)	信州大学教授 大參 義一(考古学)	南山大学教授 伊藤 秋男(考古学)	京都大学農芸類 研究所教授 江原 昭善(人類学)	金沢大学教授 藤 藤 則雄(地質学)
	中林 茂	鹿野裕佐	主事	主事	松田 定次	伊藤 幸
	水谷 良夫	主事	稻垣 隆一	主事	松田 定次	石黒 立人

期音間

昭和59年4月~昭和60年3月	愛知学院大学教授 名古屋大学教授 信州大学教授 南山大学教授	溝田 正一(考古学) 井関弘太郎(地理学) 大參 義一(考古学) 伊藤 享男(考古学)	調査部長 管理課長 主査 主任	中林 茂 斎藤 樹三 堀垣 隆一 伊藤 義幸	発掘調査所長 主事 タ ム ク	鴻本 宏 遠藤 才文 清水雷太郎 福岡 雅彦 金原 宏 上部 勝 竹内 尚武 梅村 清春 梅本 博志 佐藤 公保 石黒 立人 宮脇 健司 長島 広 安藤 義弘	雅司 才文 太郎 彦 宏 勝 尚武 清春 博志 公保 立人 健司 廣 義弘
				・	・	・	・

調査体制 昭和60年～昭和61年 調査主体 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

調査期間 昭和60年4月～6月

理事長

奥田 信之 県教育長
常務理事
中林 茂 兼事務局長
理事
井関弘太郎 名古屋大学教授
伊藤 秋男 南山大学教授
大参 義一 信州大学教授
坪井 清足 奈良国文化財研究所長
植崎 彰一 名古屋大学教授
三浦 小春 光陵女子短期大学教授
花木 馬雄 都市教育長会会長（一宮市教育長）
伊藤 芳 町村教育長会会長（蟹江町教育長）
大橋 雄六 土木部長
小島 俊夫 県教育委員会社会教育部長
林 正治 清洲貝殻山貝塚資料館長（清洲町長）
鈴木 騰美 県陶磁資料館副館長
監事
本田 辰郎 県出納事務局次長
田中 隆三 県教育委員会総務課長

専門委員

考古 学 植崎 彰一 名古屋大学教授
文献 史 学 早川 庄八 ク
地理 学 井関弘太郎 ク
建築 史 学 浅野 清 愛知工業大学教授
動・植物学 渡辺 誠 名古屋大学助教授
形質人類学 池田 次郎 京都大学教授
保存 科 学 江本 義理 東京国立文化財研究所保存科学部長
調査担当
調査課長 橋本 雅司
課長補佐兼主査 遠藤 才文
課長補佐兼主査 清水雷太郎
主査 上部 肇
主事 浅井 和宏
ク 酒井 俊彦
事務局
管理課長 斎藤 樹三
主査 稲垣 隆一
主事 伊藤 義幸
ク 森 信孔
ク 小倉 啓美

調査期間 昭和61年4月～12月

理事長

小金 淳 県教育長
常務理事
中林 茂 兼事務局長
理事
井関弘太郎 名古屋大学教授
伊藤 秋男 南山大学教授
大参 義一 信州大学教授
坪井 清足 岐大文化財センター理事長
植崎 彰一 名古屋大学教授
三浦 小春 中日新聞報道
花木 馬雄 都市教育長協議会会長（一宮市教育長）
伊藤 芳 町村教育長協議会会長（蟹江町教育長）
(6月30日辞任)
栗本 茂一 “（小坂井町教育長）
(7月1日就任・11月30日辞任)
大溪 紀雄 “（吉良町教育長）
(12月1日就任)
大橋 雄六 土木部長
中沖 秀雄 県教育委員会社会教育部長
林 正治 清洲貝殻山貝塚資料館長（清洲町長）
日下 美之 県陶磁資料館長
監事
石原 批男 県出納事務局次長
田中 隆三 県教育委員会総務課長

専門委員

考古 学 植崎 彰一 名古屋大学教授
文献 史 学 早川 庄八 名古屋大学教授
地理 学 井関弘太郎 名古屋大学教授
建築 史 学 浅野 清 愛知工業大学教授
動・植物学 渡辺 誠 名古屋大学助教授
形質人類学 池田 次郎 岡山理科大学教授
保存 科 学 江本 義理 東京国立文化財研究所保存科学部長
岩石 学 調訪 兼位 名古屋大学教授（7月1日就任）
木材組織学 木方 洋二 名古屋大学教授（7月1日就任）
調査担当
調査課長 橋本 雅司
課長補佐兼主査 竹内 尚武
課長補佐兼主査 清水雷太郎
主事 浅井 和宏
嘱託 菅沼 良則
事務局
管理課長 斎藤 樹三
主査 青山 光一
主事 森 信孔
主事 田上 堅三
小倉 啓美

目 次

第Ⅰ章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過	1
2. 遺跡の概観	4
A. 地理的環境と遺跡の立地	4
B. 歴史的環境	6

第Ⅱ章 調査の成果

1. 番序	9
2. 弥生時代	12
I期 遺構	18
遺物	33
II期 遺構	93
遺物	88
III期 遺構	131
遺物	143
IV期 遺構	186
遺物	188
3. 鎌倉・室町時代	193
A. 遺構	193
a. 溝	193
b. 井戸	202
c. 堀立柱建物	208
d. 土坑	211
e. 墓	214
f. 道	215
g. その他	216
h. 屋敷地	216
i. 遺構の年代	217
b. 遺物	221
a. 土器・陶磁器類	221

b. 木製品	242
c. 漆製品	243
d. 金属器	243
e. 石製品	243

第III章 分析・考察

1. 弥生時代の遺構と遺物	245
A. 遺構	245
a. 遺跡の地表面について	246
b. 遺構の変遷について	247
B. 土器	251
a. 前言	251
b. 時期区分および系統区分	253
c. 土器の変化—A系統を中心に	263
d. 土器の変化—外来系を中心に	272
e. 土器の変化—折衷型土器について	280
f. 弥生土器総括	286
C. 石器	288
2. 自然科学的分析	289
A. 阿弥陀寺遺跡の土器胎土の特徴について	289
B. 阿弥陀寺遺跡から出土した緑色の岩石について	300
C. 阿弥陀寺遺跡から出土した赤色物質のX線回折分析	301
D. 阿弥陀寺遺跡の炭化米について	302
E. 「中世土器」の胎土	304

第IV章 まとめと課題

1. 弥生時代	309
2. 鎌倉・室町時代	310
一覧表	311
註・文献	337

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 調査区位置図	3
第3図 阿弥陀寺遺跡と朝日遺跡	5
第4図 幼生時代中期の尾張平野	6
第5図 阿弥陀寺遺跡周辺の条里地割り	8
第6図 福田川周辺の採集遺物および基日寺・法性寺出土軒丸瓦	8
第7図 基本土層図位置図	10
第8図 基本土層図	11
第9図 SB 17ブラン・セクション	18
第10図 東壁際河原石出土状態	19
第11図 SB 19ブラン・セクション・土層セクション	19
第12図 SB 28ブラン・セクション・土層セクション・柱穴セクション	20
第13図 SB 29ブラン・セクション	21
第14図 SB 30ブラン・土層セクション	22
第15図 SB 31ブラン・セクション	22
第16図 SB 42・43ブラン・セクション	23
第17図 SB 45ブラン・セクション・土層セクション	23
第18図 SB 49ブラン・セクション	24
第19図 SB 51・52ブラン・セクション	24
第20図 SB 53ブラン・セクション	25
第21図 SB 54ブラン・セクション・土層セクション	26
第22図 SB 55ブラン・セクション	26
第23図 SB 56ブラン・セクション	27
第24図 SB 59ブラン・セクション	28
第25図 SB 64ブラン・セクション	29
第26図 SB 72ブラン・セクション	29
第27図 SA 01ブラン・セクション	30
第28図 SD 04・SX 07・08ブラン・土層セクション	31
第29図 SD 04土層セクション写真	31
第30図 土坑土層セクション	32
第31図 SB 15出土土器	33
第32図 SB 17出土土器	34
第33図 SB 19出土土器(1)	35
第34図 SB 19出土土器(2)	36
第35図 SB 28出土土器	37
第36図 SB 29土器出土状態	39
第37図 SB 29出土土器(1)	40
第38図 SB 29出土土器(2)	41
第39図 SB 29出土土器(3)	42
第40図 SB 30土器出土状態	44
第41図 SB 30出土土器(1)	45
第42図 SB 30出土土器(2)	46
第43図 SB 31出土土器	47
第44図 SB 39出土土器	47
第45図 SB 41出土土器	48
第46図 SB 43・44土器出土状態	48
第47図 SB 43・44・45出土土器	49
第48図 SB 46出土土器	50
第49図 SB 47出土土器	50
第50図 SB 49出土土器	51
第51図 SB 52出土土器	52
第52図 SB 54出土土器	53
第53図 SB 55出土土器	54
第54図 SB 56出土土器(1)	55
第55図 SB 56出土土器(2)	56
第56図 SB 56出土土器(3)	57
第57図 SB 56出土土器(4)	58
第58図 SB 59出土土器(1)	59
第59図 SB 59出土土器(2)	60
第60図 SB 66出土土器	60
第61図 SK 73出土土器(1)	61
第62図 SK 73出土土器(2)	62
第63図 SK 74出土土器(1)	64
第64図 SK 74出土土器(2)	65
第65図 SK 74出土土器(3)	66
第66図 SK 74出土土器(4)	67
第67図 SK 96出土土器	68
第68図 SK 107出土土器	68
第69図 SK 140出土土器(1)	69
第70図 SK 140出土土器(2)	70
第71図 SK 151出土土器	71
第72図 SK 181出土土器(1)	72
第73図 SK 181出土土器(2)	73
第74図 SK 185出土土器(1)	74
第75図 SK 185出土土器(2)	75
第76図 SK 193出土土器	76
第77図 SK 212出土土器	77
第78図 SK 228出土土器	78
第79図 SK 280出土土器	79
第80図 SK 295出土土器	79
第81図 SK 297出土土器	80
第82図 SK 314出土土器	81
第83図 419口縁部内面拓図	82
第84図 SD 10出土土器	84
第85図 ヨブ付太茎窓(D系統)	85
第86図 統条痕紋系土器	86

第87回	Ca 系統精製鉱	86	第133回	S K 98出土土器	122
第88回	石器（1）	87	第134回	S K 111出土土器	123
第89回	石器（2）	88	第135回	S K 112出土土器（1）	123
第90回	石器（3）	89	第136回	S K 112出土土器（2）	124
第91回	石器（4）	90	第137回	S K 120出土土器	124
第92回	木器	91	第138回	S K 122出土土器	125
第93回	土製品	92	第139回	S K 221出土土器	125
第94回	S B 08ブラン・セクション	93	第140回	S K 224出土土器	126
第95回	S B 13ブラン・セクション	93	第141回	S K 247出土土器	126
第96回	S B 18ブラン・セクション	94	第142回	S K 298出土土器	127
第97回	S B 25ブラン・セクション	95	第143回	端弧紋をもつ土器	128
第98回	S B 32ブラン・セクション・土層セクション	96	第144回	線刻のある脚状土製品	128
第99回	S B 34a・bブラン・セクション	97	第145回	土盤円盤他	128
第100回	S B 36ブラン・セクション	97	第146回	石器（1）	129
第101回	S B 58ブラン・セクション	98	第147回	石器（2）	130
第102回	S B 61ブラン・セクション	98	第148回	S B 05ブラン・セクション・土層セクション	131
第103回	S K 120土器出土状態	99	第149回	S B 11ブラン・セクション	131
第104回	S K 315土器出土状態	99	第150回	S B 62ブラン・セクション	132
第105回	S B 12出土土器（1）	100	第151回	S B 01ブラン・土層セクション	133
第106回	S B 12出土土器（2）	101	第152回	S B 02ブラン・セクション	133
第107回	S B 14出土土器	102	第153回	S B 04土層セクション	133
第108回	S B 18出土土器（1）	102	第154回	SZ 01ブラン・セクション	134
第109回	S B 18出土土器（2）	103	第155回	S D 05土層セクション	135
第110回	S B 20出土土器	103	第156回	S Z 02（S D 08）土層セクション	135
第111回	S B 21出土土器	104	第157回	S Z 03土層セクション	136
第112回	S B 32土器出土状態	105	第158回	SZ 03ブラン・セクション	137
第113回	S B 32出土土器	106	第159回	環濠土層セクション	138
第114回	S B 33土器出土状態	107	第160回	環濠土層セクション他	139
第115回	S B 33出土土器（1）	108	第161回	突出部および環濠ブラン・セクション	140
第116回	S B 33出土土器（2）	109	第162回	S K 01土層セクション	140
第117回	S B 33出土土器（3）	110	第163回	S K 23土層セクション・ブラン・セクション	141
第118回	S B 61出土土器	111	第164回	S K 25土層セクション写真	141
第119回	S B 67土器出土状態	112	第165回	S B 05出土土器	143
第120回	S B 67・他出土土器	113	第166回	S B 11出土土器	144
第121回	S B 68出土土器	114	第167回	S B 34出土土器	145
第122回	S B 69出土土器	114	第168回	S B 40出土土状	146
第123回	S B 71炉石	115	第169回	S B 40出土土器（1）	147
第124回	S B 71出土状態・東壁土層セクション	116	第170回	S B 40出土土器（2）	148
第125回	S B 71出土土器	117	第171回	S B 40出土土器（3）	149
第126回	S D 09出土土器（1）	118	第172回	S B 40出土土器（4）	150
第127回	S D 09出土土器（2）	119	第173回	SE 01土器出土状態	152
第128回	S K 03出土土器	120	第174回	SE 01出土土器	153
第129回	S K 06出土土器	120	第175回	SE 03出土土器	154
第130回	S K 08出土土器	120	第176回	SE 06出土土器	154
第131回	S K 37出土土器	121	第177回	SE 07出土土器	155
第132回	S K 67出土土器	121	第178回	SZ 01（S D 05）出土土器	156

第179回 SZ 02出土土器	157	第222回 S Z1001写真	214
第180回 SZ 03土器出土状態	159	第223回 S F1005写真	215
第181回 SZ 03 (S D 14) 出土土器 (1)	160	第224回 屋敷地 1 ~ 3	217
第182回 SZ 03 (S D 15) 出土土器 (2)	161	第225回 中世土器の分類 (1)	222
第183回 SZ 03出土土器 (3)	162	第226回 中世土器の分類 (2)	223
第184回 S D 03出土土器	164	第227回 中世土器の分類 (3)	224
第185回 S D 18出土銅鐸形土製品	165	第228回 S D1002東西部遺物出土状態写真	239
第186回 S K 23上土器出土状態	168	第229回 S D1024遺物出土状態写真	240
第187回 S K 23出土土器	169	第230回 木製品および漆器	243
第188回 S K 159出土土器 (1)	170	第231回 S D1015出土五輪塔	244
第189回 S K 159出土土器 (2)	171	第232回 阿弥陀寺遺跡出土の鉄製品 (X線写真) 実物大	244
第190回 S K 255出土土器	173	第233回 I 期の谷・溝・自然流路	246
第191回 S K 262出土土器 (1)	174	第234回 I 期遺構群分割概念図	247
第192回 S K 262出土土器 (2)	175	第235回 遺構変遷図	248
第193回 S B 04上層出土土器	176	第236回 環濠推定復元図	250
第194回 S B 25上層出土土器	176	第237回 檻描紋様の変化系列	257
第195回 包含層一括出土土器	177	第238回 IV期古相	262
第196回 土器群出土位置	177	第239回 IV期新相	262
第197回 包含層出土土器	180	第240回 細縫窓口彌感の変化	263
第198回 舞茸土製品	180	第241回 檻描紋の施紋順序と変化	265
第199回 石器 (1)	182	第242回 磨消線紋の変化	265
第200回 石器 (2)	183	第243回 葵日形變の変化	266
第201回 S D 03木器出土状態	184	第244回 底部成形技法	266
第202回 木器	185	第245回 鮫状・脚状土製品の器高変化	267
第203回 S B 70ブラン・セクション	186	第246回 台付鏡脚台の変遷過程	268
第204回 S D 07上層セクション	186	第247回 III期台付鏡に開ける各層域	268
第205回 S E・S X 土層セクション	187	第248回 檻描紋原体	270
第206回 S B 70出土土器	188	第249回 織紋要素の互換性	271
第207回 土製品	190	第250回 C ₄ 系統織紋様の特徴	272
第208回 遺構配置図 (鎌倉・室町時代)	194	第251回 D系統 (瘤状突起太頸) 壺の変化	275
第209回 S D1023東西土層セクション	197	第252回 W系統土器のイメージ	278
第210回 S D1024南北土層セクション	197	第253回 III期各種縫合分布図	279
第211回 S D1025・1026南北土層セクション	198	第254回 各系統相関図	282
第212回 S D1038・1039写真	199	第255回 系統概念図と相關関係概念図	285
第213回 S D1002東西土層セクション	201	第256回 グループ別重鉛物組成 (1)	293
第214回 S D1001東西土層セクション	201	第257回 グループ別重鉛物組成 (2)	294
第215回 S D1004・1005南北土層セクション	201	第258回 Qz+Fl-Bt+Mv-Mf 三角ダイヤグラム	298
第216回 S D1027~S D1031南北土層セクション	201	第259回 赤色物質X線回折チャート	301
第217回 井戸プラン・(土層)セクション (1)	204	第260回 測定に用いた炭化米 (SK 312)	301
第218回 井戸プラン・(土層)セクション (2)	205	第261回 枯長 (I)・粒幅 (W)・分布図	303
第219回 大型土坑SK1001・1003写真	211	第262回 長幅比度数分布図	303
第220回 大型土坑土層セクション	212	第263回 土鍋Aの胎土と形態	307
第221回 大型土坑写真	212	第264回 胎土重鉛物組成	308

表 目 次

第1表 遺構数の変化	12	第11表 分析試料一覧表	290
第2表 管王の法量分布	191	第12表 重転物分析結果	291
第3表 床面レベル時期別度数分布	245	第13表 阿弥陀寺・トメキ遺跡の系統分類と胎土のグループ	295
第4表 遺構の重複関係	256	第14表 勝川遺跡の系統分類と胎土のグループ	296
第5表 標推紋種類別共存関係	258	第15表 瓦郷・西中遺跡の系統分類と胎土のグループ	296
第6表 B系統土器時期別出土量数	273	第16表 表面觀察結果	298
第7表 瓦 Da 分類別度数分布	274	第17表 阿弥陀寺遺跡偏光顯微鏡觀察結果	299
第8表 各系統土器出土比率	287	第18表 炭化米測定結果	302
第9表 石器種別点数	288	第19表 重転物分析結果	304
第10表 石器長形態別度数分布	288		

一覧表目次

弥生時代		土器・陶器	330
遺構	311	木製品・漆製品	337
土器・土製品	315	金属器	337
石器	327	石製品	337
管王	328	植物遺体(本文掲載以外)	337
木器	328		
縄文・室町時代			
遺構	329		

図版目次

図版1 弥生時代遺構全体図 1:1000	図版36 土器番号573~584
図版2 弥生時代遺構全体図 北半部 1:500	図版37 土器番号585~597
図版3 弥生時代遺構全体図 南半部 1:500	図版38 土器番号598~612+635
図版4 1 弥生時代遺構部分図 1:200	図版39 土器番号613~628
図版19 土器番号323~339	図版40 土器番号629~636
図版21 土器番号340~351	図版41 石器番号38~42
図版22 土器番号352~365	図版42 石器番号43~47
図版23 土器番号366~373	図版43 石器番号48~54
図版24 土器番号374~384	図版44 土器番号811~824
図版25 土器番号385~403	図版45 土器番号825~839
図版26 土器番号404~415	図版46 土器番号840~850
図版27 土器番号416~431	図版47 土器番号851~857
図版28 土器番号432~457	図版48 石器番号74~82
図版29 土器番号458~480	図版49 土器番号1070~1082
図版30 土器番号481~493	図版50 土器番号1083~1086
図版31 土器番号494~508	図版51 土器番号1087~1106
図版32 土器番号509~542	図版52 土器番号1107~1133
図版33 土器番号543~546+455+458+465+482+485+495	図版53 土器番号1134~1162
図版34 土器番号547~555	図版54 土器番号1163~1178
図版35 土器番号556~572+549	図版55 土器番号1179~1187

図版56 土器番号1188～1201	図版88 土器編年Ⅰ期～Ⅱ期 B系統壹
図版57 土器番号1202～1216	図版89 土器編年Ⅰ期～Ⅱ期 C系統壹他
図版58 土器番号1217～1204	図版90 土器編年Ⅰ期～Ⅱ期 D系統壹・C系統深鉢
図版59 土器番号1241～1246	図版91 土器編年Ⅲ期 A系統太頸壹
図版60 土器番号1247～1257	図版92 土器編年Ⅲ期 A系統細頸壹
図版61 土器番号1272～1281	図版93 土器編年Ⅲ期 A系統壹他
図版62 土器番号1282～1303	図版94 土器編年Ⅲ期 B系統壹他
図版63 土器番号1304～1317	図版95 土器編年Ⅲ期 W系統壹
図版64 土器番号1318～1325	図版96 土器編年Ⅲ期 W系統壹他
図版65 土器番号1326～1335	図版97 錆倉・室町時代遺構全体図 1 : 1600
図版66 土器番号1336～1357	図版98 錆倉・室町時代遺構部分図星雲地 1 : 400
図版67 土器番号1358～1365	図版104 錆倉・室町時代遺構部分星雲地 1 : 200
図版68 土器番号1366～1369	図版105 錆倉・室町時代遺構部分星雲地 2・3 1 : 200
図版69 土器番号1371～1386	図版107 土器番号2001～2029
図版70 土器番号1387～1398	図版108 土器番号2030～2070
図版71 土器番号1399～1419	図版109 土器番号2071～2087
図版72 土器番号1420～1433	図版110 土器番号2088～2139
図版73 土器番号1434～1440	図版111 土器番号2141～2167
図版74 土器番号1441～1448	図版112 土器番号2169～2213
図版75 土器番号1449～1460	図版113 土器番号2214～2273
図版76 石器番号113～120	図版114 土器番号2274～2326
図版77 石器番号121～128	図版115 土器番号2327～2374
図版78 土器番号1461～1475	図版116 土器番号2376～2429
図版79 土器番号1476～1490	図版117 土器番号2430～2474
図版80 土器番号1491～1508	図版118 土器番号2476～2551
図版81 石器番号129～148	図版119 土器番号2552～2583
図版82 石器番号149～157	図版120 土器番号2584～2626
図版83 土器編年Ⅰ期～Ⅱ期 a系統太頸壹	図版121 土器番号2627～2676
図版84 土器編年Ⅰ期～Ⅱ期 A系統太頸壹	図版122 土器番号2677～2714
図版85 土器編年Ⅰ期～Ⅱ期 A系統細頸壹	図版123 土器番号2715～2762
図版86 土器編年Ⅰ期～Ⅱ期 A系統壹	図版124 土器番号2763～2799
図版87 土器編年Ⅰ期～Ⅱ期 A系統各器種	

写真図版目次

写真図版 1 阿弥陀寺遺跡航空写真 北半部	写真図版 8 方形周溝墓と土器出土状態
写真図版 2 阿弥陀寺遺跡航空写真 南半部	写真図版 9 遺物出土状態(1)
写真図版 3 弥生時代中期環濠の切れ目、突出部(S X04)と再入部(S X05)全景	写真図版 10 遺物出土状態(2)
写真図版 4 S D03・04弥生時代中期居住城内部と弥生時代後期環濠(S D07)	写真図版 11 I期A系統壹
写真図版 5 弥生時代中期居住城内部(5H区北部)、井戸(S E01)、大形土坑(S X10)	写真図版 12 I期A系統壹
写真図版 6 S B19、S B42・43・51・52、S B56	写真図版 13 I期C・D系統壹他
写真図版 7 大形住居(S B28)と通常住居(S B59)、S B72、S B36	写真図版 14 I期C・B系統壹他
	写真図版 15 I期C系統深鉢他
	写真図版 16 II期A系統壹
	写真図版 17 II期A系統壹他
	写真図版 18 III期A系統壹

- 写真図版19 III期A系統壺、W系統壺
- 写真図版20 III期W系統壺
- 写真図版21 III期W系統各器種他
- 写真図版22 III期B系統壺、C系統深鉢
- 写真図版23 III期A系統台付鋸脚台部、W系統壺
- 写真図版24 IV期土器各器種
- 写真図版25 石器各種
- 写真図版26 磨製石器各種
- 写真図版27 木器、土製品
- 写真図版28 錆倉・室町時代集落部分(1)
- 写真図版29 錆倉・室町時代集落(2)、井戸
- 写真図版30 灰釉系陶器壺・小皿、素焼小皿
- 写真図版31 施釉陶器、土鍋、羽釜、曲物、他
- 写真図版32 (カラー) 阿旁陀寺遺跡出土の石斧および土器
の偏光顯微鏡写真

第二章



秋

調査の概要



測量

小学生の見学

1. 調査の経緯と経過 ━━━━━━ 石黒

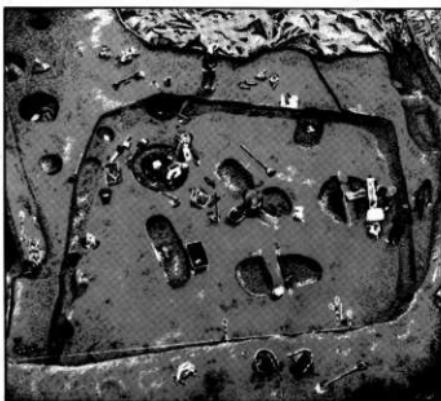
2. 遺跡の概観

A. 地理的環境と遺跡の立地 ━━━━━━ 森

B. 歴史的環境

弥生時代 ━━━━━━ 石黒

鎌倉・室町時代 ━━━━━━ 北村



1. 調査の経緯と経過

A. 経緯

所在地 阿弥陀寺遺跡は、愛知県海部郡甚目寺町大字石作・大字新居屋に存在する。すでに古くから遺物の散布地と知られ、磨製石剣など注目される遺物も採集されている。

原因 そうしたなかで、名古屋環状2号線の建設予定地に本遺跡の一部が含まれることになり、そのため、道路建設に伴う事前調査として昭和56年度から発掘調査が実施されることになった。

調査主体 昭和56年度より昭和59年度は財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部によって発掘調査が実施され、昭和60年度からは新しく設立された財団法人愛知県埋蔵文化財センターに業務が引き継がれ、昭和61年度まで継続した。

当初、弥生時代の遺跡として把握されていた阿弥陀寺遺跡も調査の進行で鎌倉・室町時代の集落跡が重複することがわかり、結果遺跡の範囲も広がることになった。



第1図 遺跡位置図

B. 経 過

昭和56年度 調査面積1200m²で開始された初年度の発掘調査は、幅10mの側道部分ということであったが、弥生時代の遺構として住居跡、環濠、方形周溝基らしい溝跡など各種が検出でき、時期区分についても大枠の設定ができた。それに対し鎌倉・室町時代に関しては溝のみで、集落跡であるという認識には至らなかった。

昭和57年度 調査面積は7940m²。幅7mの側道部分の調査で、南北600mという狭く長い発掘区であった。弥生時代の遺構は集落の様相を強く示し、新しい資料を得ることができた。鎌倉・室町時代は初めて井戸の検出があり、集落の可能性が浮上した。地形的な問題に関しては、狭く長い調査区の関係で長い土層セクションを作成することができた結果、谷や砂丘部分の復元がある程度可能となった。

昭和58年度 調査面積は5214m²。本年度も側道部分の調査で、これまでの調査範囲の北部に調査区が設定された。弥生時代の遺構は皆無であったが、現水田下に堆積した現代の客土中からは弥生土器が出土したので、阿弥陀寺遺跡の削平がかなり進んでいることが推定された。

鎌倉・室町時代は、集落内部の区画らしい溝や墓の跡が検出され、集落であることがほぼ確実視されるようになった。

昭和59年度 調査面積8894m²。初めて本道部分の調査となった。弥生時代は、環濠の変遷が予想できるようになり、ほぼ集落景観も復元できるに至った。また鎌倉・室町時代は、屋敷地を囲む溝が確認できたことにより、弥生時代の集落範囲の北部を中心のあることが推定された。

昭和60年度 調査面積5519m²。弥生時代の集落部分の北部に調査区が位置したので、環濠北縁の状況が把握できた。意味不明の突部など、団郭集落の全体設計に関わるような重要な遺構であるという感触があった。鎌倉・室町時代は、古瀬戸四耳壺などが大きな土坑から出土し墓的な遺構の存在が推定された他、礎板の遺存した柱穴が多数検出され、溝で区画された内部における建物の展開を知ることができた。

昭和61年度 調査面積1738m²。先年度と同様に建物群の検出があり、集落としての景観復元に近づいた。ただし、遺構面の削平のために同時存在の建物の抽出には困難がともなっている。

